



天明三年浅間山焼出し、人馬押流す所の図

天明三年（一七八三年）の浅間山の噴火は、日本の火山災害として最大のものであった。多くの記録が残され、この絵図はその一つで、噴火によつて発生した洪水の被害が記されている。噴火は五月九日（旧暦四月九日）に始まり、八月四日と五日（旧暦七月七日・八日）に最も激しくなった。当時の記録によると、五日午前十時ごろ、

たち昇る噴煙の中に柱を立てたようなまっ黒なもきだすと見るまに、北側の斜面を襲い、あたり一帯はらったという。これは熱雲と呼ばれる現象で、弾・火山灰などのしゃく熱した噴出物がガスととも団となって火口からなだれ落ちてくるもので、火山中で最も破壊的な被害を及ぼす。熱雲は北麓の鎌を一瞬の内に埋め、吾妻川の谷に達した。川は一時



